

「第一世界」と「第三世界」のはざまで： 日本の60年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い

高田, 圭 / TAKATA, Kei

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2024-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030871>

「第一世界」と「第三世界」のはざままで ——日本の 60 年代における「第三世界論」との 出会いと戸惑い——

高田 圭

第三世界は実在^{リアリティ}ではなく、イデオロギーである¹⁾。
ハンナ・アーレント「暴力について」

1 はじめに

1955 年、アジア・アフリカ 29 カ国の代表がインドネシアのバンドンで開催された国際会議に参加した。この会議は、その後「第一世界」の資本主義体制にも「第二世界」の共産主義体制にも属さない「第三世界」の国々による最初の国際会議として歴史に刻まれることになる。そして、その参加国の中に日本も名を連ねていた。一見すると、アジアの一国として不思議ではないかもしれない。ただし、よくよく考えてみると、日本の特徴は、他の多くの参加国とは異なっていた。大半は、植民地支配から独立したばかりで、未だ資本主義陣営にも共産主義陣営にも属していない「第三」の国々であった。それに対して日本は、欧米による植民地支配の経験はないものの、つい 10 年前まで会議の参加者である近隣のアジア諸国を植民地化、占領していた。また単独講和を選択した日本は、西側ブロックに属し、アメリカ政府の強い影響下にあった。バンドン会議は、日本が主権を回復してからわずか 3 年後の開催であり、しかも、他の参加国の多くが経済的、政治的に不安定であったのに対し、日本は、戦後の経済危機から復興し、高度経済成長期を迎えようとしていた。それでも、日本の文化的・地理的位置と、当時の冷戦下の国際関係における複雑な権力関係が、日本の参加につながったのである²⁾。

バンドンでの会議中、日本の代表団はあまり自己主張をせず、寡黙なままであったという。それは、一つに、この会議が日本にとって戦後はじめてのアジア諸国との公式な出会いの場であったからである。しかしながら、それは同時に、「第一世界」と「第三世界」、西洋と非西洋のあいだに位置する日本の微妙な立場にも起因していた。バンドン会議取材した『ル・モンド』紙のフランス人記者は、日本の参加者の控えめな態度を観察し、その理由を次のように描写している。

バンドンに来た日本人は彼らの血がわき立つのを感じた。彼らは“われわれも同じアジア人だ。アジアの人たちよ、われわれは君らと一緒に進みましょう。中国の人たちよ、われわれは中国とのつながりを新しくしなければならぬ”と叫びたい衝動にかられた。しかし一方においてバンドンに来た日本人は、沢山のきずなが日本を西欧に結びつけているのを発見した。それはたんなる日本と米国の軍事同盟だけにあるのではない。それは日本が西欧諸国と同じ経済圏に属しているという、より永続的で根の深い事実なのだ³⁾。

実際、フランス人記者によって指摘されたこうした両義性は、明治維新以降、特に第二次世界大戦後の近代化プロジェクトにおいて、日本人の隠れたメンタリティの最も重要な特徴の一つと言える。ただし、バンドン会議からおおよそ10年後の1960年代後半に、突如としてこの隠れた意識を直視しなければならないタイミングが訪れた。それは、「第三世界論」という西洋（あるいは西洋の中の非西洋）から生まれた西洋批判がきっかけだった。西洋から発せられた西洋批判、そしてその担い手としての「第三世界」という論理は、近代化プロジェクトに邁進していた日本人に衝撃をもたらした。そのインパクトは、非西洋の「第三世界」の人々のものとも西洋の「第一世界」の人々が受けたものとも異なる固有のものだったと言える。それでは、日本の人々は「第三世界論」とどのように出会い、それはどのような影響をもたらしたのだろうか。本稿は、こうした問いに答えるものである。日本において最初に「第三世界論」と正面から向き合ったのは、1960年代運動に関わっ

た知識人・活動家たちであった。そのため、本稿では、社会運動が隆盛を極めた1960年代後半に人々がどのように「第三世界」と出会い、戸惑いを感じながらそれを独自の思想へと昇華させていったのかを論じる。

国境を越えて広がった「第三世界」概念／「第三世界論」を日本の60年代運動がどのように受け入れていったのかを分析する本稿は、学問的系譜から言えば、いわゆる「グローバルな60年代(Global Sixties)」研究に位置づけられる。60年代研究は、1950年代後半から1970年代半ばにかけて起きた政治的、社会的、文化的な激動、そしてそれがもたらした変化・変動を検証する学際的な研究領域である⁴⁾。2000年代以降、60年代研究は、グローバルかつトランスナショナルな方向へと向かい、「第三世界」についても60年代研究の重要なテーマの一つとなった。そうした研究には、「第三世界」における急進的な運動や、「第一世界」における西洋支配とヨーロッパ中心主義に抗する人種的マイノリティによる活動が含まれる。ただし、それらは欧米の60年代運動への影響に関する研究が中心であった⁵⁾。近年では、「第三世界」内部での連帯に注目する研究も増えてきたが、興味深いことに日本の事例は両者の潮流には組み込まれず、十分に検証されてこなかった⁶⁾。

ただし、本稿の狙いは、こうした研究群に日本の事例を付加えるだけに留まらない⁷⁾。本稿で論じる日本の事例は、「第三世界論」という考え方がどのように広まり、また受容されたかという一般的な問いに対して、より複雑な図式を提示できるものとする。規範やアイデアといったものは国境を越えて波及していくが、それを受け取る各々の国や地域のアクターたちは、それらを鵜呑みにするのではなく、主体的に解釈し、それを自らの文脈に即して活用する。従って、伝播と受容の関係は、一方通行ではなく、受容する側にもエージェンシーがある。ただし、その解釈や想像の主体は、それぞれが埋め込まれた構造によって制約を受ける。従って、本稿が論じる「第三世界論」という世界的に広まった思想の受容のされ方や解釈も、世界各地域のナショナルやローカルな構造に応じて多様性が生じると言えよう。日本の場合、60年代運動と「第三世界」との関係は、典型的な「第一世界」の60年

代運動のそれとも、また「第三世界」内部の60年代運動とも異なった「日本的固有性」があるというのが本稿の見立てである。また、そうした「固有性」とは何かと問われれば、冒頭で紹介した「3つの世界モデル」における日本のはざま的位置が日本の活動家に「第三世界」へのアンビヴァレントな意識をもたらしたと言うのが仮説となる⁸⁾。むしろ、この時代に日本だけが「第一世界」と「第三世界」の「はざま」にあったわけではない⁹⁾。それでも、60年代運動や「第三世界論」が世界的に波及していくちょうどその時期に、非西洋国の一つとして「第一世界」に取り込まれていった日本は極めて興味深い事例となるであろう。

他方で、日本研究の視点から見れば、こうした分析は「日本のトランスナショナルなカタチ」を浮かび上がらせる一助ともなる¹⁰⁾。海外渡航が自由化(1964年)され、東京オリンピック(1964年)や大阪万博(1970年)が開催された1960年代なかばから1970年代前半は、戦後日本のトランスナショナル・ヒストリーにとって重要な時期であった。こうした大きな流れと並行して、1960年代後半は、市民社会においてもトランスナショナルな運動が展開されはじめるタイミングでもあった。国境を超えた結びつきを強める中で、日本と「第三世界」との出会いを分析することは、ナショナル・ヒストリーからの分析では見えてこない、当時の日本の姿の一片を明らかにすることができる。また、こうしたアイデアのトランスナショナルな移動というミクロな分析に、「第一世界」と「第三世界」のはざまというマクロな視点を導入することで、1960年代後半当時の日本のカタチがおぼろげに浮かび上がってくるだろう¹¹⁾。

以上のような学問的貢献を踏まえて、本稿の概要について述べておく。本稿の主題は、日本の知識人・活動家たちがどのように「第三世界論」に出会い、またその結果、どのような独自の思想を醸成させていったのかを明らかにするものである。こうした問いに答えるための具体的な分析として、「第三世界(Third World)」と「第三世界論(Third Worldism)」という2つの関連しながらも異なる概念の受容のプロセスを考察する。本論では、まず、

フランスで発展した「第三世界」概念の歴史的背景を紹介した後、この概念が1960年代半ばに日本に導入され、1970年代以降に普及していく過程を明らかにする（第2節）。続いて、フランツ・ファノンの翻訳を主題に、「第三世界論」がどのように異なる政治文化を持つグループ間の対立・競争を経て、日本の60年代運動に取り込まれていったのかを探る（第3節）。そして最後に、日本の活動家たちが「第三世界運動」との連帯を模索する際に感じた葛藤とそこから生まれた独自の思想を、市民運動派とラディカル運動派双方の活動家・思想家の言説に焦点を当てながら明らかにしていく（第4節）¹²⁾。なお、前者については作家でありベ平連のリーダーであった小田実、後者は映画評論家で有力なアジテーターであった松田政男の言説を扱う。

2 「第三世界」の誕生と日本への導入

「第三世界」概念は、1960年代から1970年代にかけて注目され、冷戦の終結とともにその影響力は低下していった。その後、世界は三つではなく二つに分類されるようになり、21世紀に入ると「グローバル・サウス（Global South）」の語に取って代わられるようになる¹³⁾。半世紀にも満たない流行であったものの、この言葉は、世界的に大きなインパクトを与えた。では、「第三世界」の語はいつ、どこで生まれたのだろうか。それは、一般的に冷戦が激化しはじめた1950年代初頭にフランスで誕生したとされる。具体的にはフランスの経済学者で人口学者のアルフレッド・ソーヴィ（Alfred Sauvy）が、1952年に雑誌 *L'Observateur* に “Trois mondes, une planete（「三つの世界・一つの惑星」未邦訳）” と題する小論で使用したのがはじまりだった¹⁴⁾。ソーヴィがこの概念を生み出した背景には、当時のフランスの状況が密接に関係していた。人口学者のソーヴィは、第二次大戦後に激増した植民地からフランスへの大量の移民流入を問題視しており、植民地を西洋文明とは相容れない経済的・文化的に劣る「第三世界」と呼んだのである¹⁵⁾。従って、この言葉が生まれた当初「第三世界」には、西洋文明の植民地主義的で保守主義的な精神が強く帯びていた。その後、フランス国立人口統計研究所でソーヴィの同僚であったジョルジュ・バランディエ（Georges Balandier）が、1956

年に論集 *Le Tiers-Monde, sous-développement et développement*（「第三世界 ―発展途上と発展―」未邦訳）を出版し、ソーヴィの言葉を社会科学のパラダイムへと発展させた¹⁶⁾。バランディエの理論は、資本主義・社会主義圏以外の非西洋地域の経済的未発達状態を先進国である欧米から眼差すいわゆる従属理論に影響を受けたものであり、従って、ここにもソ連圏を除いた「その他の地域」を支配・管理しようとする欧米の意志が垣間見えた¹⁷⁾。

この言葉は、その後、瞬く間に西洋の「第一世界」を中心に広まっていったが、同時にその言葉の意味内容は大きな転換を迎えていく。「第三世界論」は、「第三世界」という当初のコロニアルな意志をともなった社会科学用語から、反西洋中心主義と社会変革といった反体制的メッセージを帯びた言葉へと変化していったのである。きっかけは、フランスと国民解放戦線（FLN）のあいだで起きたアルジェリア戦争（1954～62年）であった。フランスの植民地マルティニーク出身の精神科医／哲学者であったフランツ・ファノン は、FLN メンバーとしてアルジェリア戦争に参加した。アルジェリア独立間近の1961年に出版されたファノンの主著 *Les Damnés de la Terre*（日本語訳『地に呪われた者』、英語訳 *The Wretched of the Earth*）は、植民地化による非人間的影響を心理学的に分析し、脱植民地化のプロセスをトランスナショナルな連帯の運動として位置付ける画期的な著作であった。そして本書の結論でファノンは、「＜第三世界＞にとっては、人間の歴史を再びはじめることが問題だ」と述べ、「同志たちよ、ヨーロッパから想を得た国家・制度・社会を作り上げて、ヨーロッパに貢ぐことはやめようでないか」と訴えた¹⁸⁾。植民地出身の知識人が、自分たちを管理・支配するために生み出された「第三世界」という言葉を用い、「第三世界」の連帯を通じて「新しい歴史」を作ること訴えかけたことは極めて画期的であった。本書をきっかけに「第三世界」という言葉は、「第三世界」の人々をエンパワーする従来とはまったく異なる新たな意味を帯びるようになった。それは、非西洋の人々が西洋から言葉を奪い取ったことを意味し、また「第三世界」という新たな主体を生み出す契機となったのである¹⁹⁾。

こうした言葉の変遷は、実際に「第三世界」で展開されていた政治運動とも関連していた。時間軸で見ると、「第三世界」の運動は二つの段階に分けられる。1950年代初頭から1960年代半ばまでの前半期は、国民国家の独立を求める反植民地闘争の時期である。この段階では、民族主義的ナショナリズムの意識が支配的で、国民国家を「超える」という意味でのトランスナショナルな側面は希薄であった。また、運動の激しい暴力性にもかかわらず、思想的には、植民地のブルジョワエリートたちと結びついていたため、資本主義との親和性も高かった。しかし、多くの旧植民地が独立を果たした1960年代半ば以降の後半期になると、運動はネオ・コロニアリズムや新しいかたちの帝国主義を抵抗の対象とし、またより強くトランスナショナルな性質を帯びるようになると同時に、反資本主義のイデオロギーも強まっていった²⁰⁾。 *Les Damnés de la Terre* (『地に呪われたる者』) は、こうした「第三世界」運動の第1期の後半に発表され、第2期における運動のトランスナショナル化に多大な影響を与えた。こうして、1960年代後半になると「第三世界論」は、歴史家ヴィジャイ・ブラシャド (Vijay Prashad) が³⁾、「第三世界プロジェクト (The Third World project)」と表現したように、「非力 (powerless)」な者たちが「権力者たち (powerful)」の責任を追求する「企て (project)」として世界中に拡散していった²¹⁾。アメリカの元 SDS (Students for a Democratic Society) リーダーのトッド・ギトリン (Todd Gitlin) が回想するように「(60年代運動に参加した) われわれは次第に規範とすべき英雄たちをキューバ・中国をはじめとする第三世界のゲリラ運動の中に、毛沢東やフランツ・ファノン、チェ・ゲバラやレジス・ドブレ、とりわけベトナムに見るようになった」のである²²⁾。



図1 1960-1989年の言論雑誌5誌における「第三世界」と題された記事数の推移²³⁾

翻って「第三世界」ならびに「第三世界論」は、60年代の日本の市民社会にも大きな影響を与えた。しかし、「第三世界」という言葉の日本での採用は比較的遅く、当時の主要な言論雑誌において「第三世界」の語をタイトルに含んだ記事が掲載されたのは1965年12月が最初であった²⁴⁾。これはアルフレッド・ソーヴィの論考から13年後、フランスでファノンの『地に呪われた者』が出版されてからおよそ4年後のことである。また1965年から1969年まで、主要な月刊／週刊の言論誌5誌で年平均1.8本と、1960年代を通じて記事数も控えめであった。実際、日本の公論において、「第三世界」のブームは1960年代というより1970年代に訪れたと言える。「第三世界」の記事数の推移(「図1」)を見ても、最初の流行は1970年代前半(1972年～1975年)に訪れ、一度落ち着いた後、1970年代後半から1980年代前半(1978年～1982年)にかけてピークを迎えたことが分かる。そして、冷戦崩壊の足音が聞こえはじめる1980年代半ばになると、その数は著しく減少していった。

日本での導入が遅れた理由として、この語がフランスで一般化してから海外に輸出されたことが一因として挙げられる。アルフレッド・ソーヴィの著作は既に1950年代初頭には日本語に翻訳されていた。ただし、それは人口学や経済学の一部の研究者のあいだでの認知に留まっており、また「第三

界」概念の提唱者としての注目でもなかった²⁵⁾。従って、日本の多くの学者やジャーナリストたちは、「第三世界」をソーヴィエの仕事から直接輸入したのではなく、この言葉が欧米のメディアで注目され一般化した後に使われるようになったと考えられる。このように、当初日本の書き手たちは、元となったフランスでの学術的な議論に言及することなく、「第三世界」を含めた「三つの世界論」を単に世界を三分する使い勝手の良い概念として用いていたと言える。

日本における「第三世界」概念の導入について注目すべきもう一つの点として、60年代運動がピークに達した1968年頃に「第三世界」は、未だ日本社会では一般的に広く使われる言葉ではなかったことが挙げられる。実際にある評論家は、1968年初頭に「最近、第三世界とか第三文明ということが問題になり、新聞の論壇時評などでもまとめて取り上げられるほど多くの発言を生んでいるが、まだ一般になじみの薄いテーマに属する」と述べている²⁶⁾。それでは、なぜ日本における「第三世界」の普及は、1970年代まで待たねばならなかったのだろうか。それは一つに、1960年代後半の運動の盛り上がりこそが新たな思想を求め、考え、発信する推進力となったからだと考えられる。60年代運動がピークに向かうまさにその時期に、運動に関わっていた思想家や活動家たちがローカル・ナショナル・トランスナショナルに「第三世界」について学び、議論し、実践するパブリクスを作り出していった。後述するように、運動の激化の中で日本の思想家や活動家たちは、「第三世界」あるいは「第三世界論」という言葉が日本人にとって何を意味するかについて様々に考えを巡らせていった。そうした複雑に交錯した受容のプロセスを経て、この言葉は、ようやく1970年代以降になって一般に広まっていったと考えられる。

3 日本の60年代における「第三世界論」とフランツ・ファノン

「第三世界」が日本にはじめて紹介された1960年代前半において、この言葉は、ソーヴィエらの社会科学用語に近い意味合いで使われることが一般的で

あった。しかし、1960年代半ばになると、幾人かの活動家や知識人によって、より政治的な意味を帯びた「第三世界論」が紹介されるようになる。「第三世界」の運動について最初に敏感に反応したのは、若い学生活動家たちではなく、すでに学者、作家、編集者、あるいは活動家としてキャリアを歩みはじめていた年齢で言えば30代のやや上の世代の人たちであった。彼らの多くは外国語が堪能で、また社会関係資本も高く、多くの若い学生運動家たちよりも比較的早く海外の情報にアクセスすることができた。また、自分たちが集めた情報をより多くの人々に紹介するためのネットワークや経験、そしてメディアをも有していた。他方でベトナム戦争が激化した1965年以降、それまで国内的・地域的な問題への関心が強かった日本の60年代運動も、次第にトランスナショナルな様相を呈してくる。こうした運動の国境を越えた広がり刺激され、彼らは海外の社会運動にも関心を広げていった。当初は欧米「第一世界」の情報が主であったが、次第に「第三世界」の情報へと関心を広げていく。

「第三世界論」を日本へ導入する主だった方法の一つは、「第三世界」の代表的な人物、例えばチェ・ゲバラ、ホー・チ・ミン、毛沢東などの著作を翻訳することであった²⁷⁾。フランツ・ファノンも、先述したように植民地化された人々の苦しみと怒りを代弁する「第三世界論」の重要な論者であり、特に1961年に白血病で早世した後は、世界中のマイノリティたちに多数派の支配する社会と直接対決することを促すカリスマ的な革命思想家と見做されるようになった。日本においても、1960年代半ばには、他の世界的な革命家たちとともに、最も翻訳が待ちわびられる書き手の一人となっていたという²⁸⁾。日本においては、やや性質の異なる2つのグループが「第三世界論」、特にファノンの仕事を積極的に紹介していった。それは第一に、ベトナム反戦運動を展開した市民ネットワークのベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)に集う知識人たちであった。ベ平連は欧米のニューレフトと精神的に国境を越えたネットワークを構築する一方で、運動の後半には「第三世界」の情報も紹介するようになり、後述するようにキューバなどにも連帯を求めて渡航していた。そのベ平連運動にも関わっていたフランス文学者の鈴木道彦と海

老坂武が、ファノンの『地に呪われたる者』『黒い肌、白い仮面』の翻訳の中心的な担い手たちとなった。彼らは、ファノンのこれら二作の翻訳をまとめた著書を1968年12月に出版した²⁹⁾。批評家の菅孝行は、「日本における思想としての第三世界論は、おそらくフランツ・ファノンの著作によってはじめて大衆化せしめられた」と述べている³⁰⁾。こうして、日本は1960年代後半にファノンを通じて「第三世界論」ブームを迎えていく。

ファノンの翻訳へと到る経緯を見てみると、2人の翻訳者とファノンとの出会いは比較的早かったものの、それは必ずしも意図的なものではなかった。「サルトル派」を自認する海老坂のファノンとの出会いは、直接的ではなく、FLNを支援し、『地に呪われたる者』の序文を書くなどファノンを熱心に支援していたフランスの進歩的知識人ジャン・ポール・サルトルを通じてのものであった³¹⁾。1962年1月、当時大学院生であった海老坂は、東京の書店で偶然にも『地に呪われたる者』の原著を手にとった。しかし、それはファノンへの関心からではなく、また明らかに革命歌*L'Internationale*の歌詞を意識したと思われる*Les Damnés de la Terre*というタイトルでもなく、海老坂の目を奪ったのは、表紙に小さく書かれた「サルトルによる序文」であったという。早速、先輩の鈴木道彦とともにこの序文を翻訳することになったが、これが図らずもファノンを日本の文脈で紹介する最初のものとなった³²⁾。とはいえ、海老坂はすぐにファノンの反西洋的なメッセージに共感したわけではなかった。確かに「新しい人間史の創造」と「ヨーロッパ世界との決別」を訴える『地に呪われたる者』の結末には、驚かされた。しかし、パリ留学を控えた非西洋出身のフランス文学者としては、ファノンの西洋世界に対する反感に躊躇なく共感することはできなかった。こうした海老坂の認識を一変させたのが1963年からのパリ滞在であった。特に、留学先のキャンパス内にあるカフェテリアでのアフリカやアジアからの留学生との日常的な出会い、また『ル・モンド (*Le Monde*)』紙上で報じられる「第三世界」に関する情報を通じて、「第三世界論」への啓蒙を受けることになった。ファノンのことを知ったのも、そのような機会であった。フランス人を含めてヨーロッパの学生のほとんどがファノンについて何も知らなかったのに対し、海

老坂が出会ったマルチニック人はみな、その内容について詳しく理解していないにしても『黒い皮膚・白い仮面』の著者としてファノンの名前を知り、また敬意を抱いていた。3年間のパリ滞在を終える直前、海老坂は『黒い皮膚・白い仮面』の復刻版を見つけ、日本へ持ち帰った。そして帰国後、ファノンの日本での紹介に精力的に取り組んだ³³⁾。

似たような経験は、ファノンのもう一人の翻訳者である鈴木道彦にも見られる。鈴木は、1960年代初頭、駐日アルジェリア大使を通じて、はじめてファノンを知ったと回顧している。しかし、その後の「第三世界論」への傾倒には、フランスでの生活が不可欠だった³⁴⁾。彼のフランス滞在は海老坂よりも早く、1954年、ちょうどフランスが植民地アルジェリアの独立をめぐる戦争に遭遇した時期であった。フランスでアルジェリア戦争を見聞し、北アフリカのFLNシンパの学生たちと交流したことが、鈴木の人生的変えかけとなった。こうしたコミュニケーションを通じてそれまで無関心だった植民地問題に目を開かされたのである³⁵⁾。海老坂と鈴木に共通していたのは「第三世界」の人々とのトランスナショナルな交流であった。そこでの気づき、もっと言えばアイデンティティの転換が、後にベトナム戦争という政治的な実践と結実し、日本での「第三世界論」の紹介者へと誘ったのである。

しかしながら、ファノンの翻訳に関して注目すべき重要な事実がもう一つある。それは、鈴木・海老坂による翻訳が、最初ではなかったということだ。鈴木らの翻訳が大手出版社から刊行される9ヶ月前の1968年3月に『地に呪われた者』の最も重要な章とされる第1章「暴力について」の翻訳が、『世界革命運動情報』という地下出版的な色合いを持つ雑誌に掲載されていた。フランス語版の著作権は、既に鈴木・海老坂らの出版企画が独占していたため、それは1967年に出版された英訳版を基にした翻訳であった。企画を担った松田政男は、英語版の翻訳になったことに関しては、「むしろ、私たちは翻訳の不十分さを恐れる」としつつも、「日本の呑気なフランス文学者たちがファノンの翻訳と刊行を掛け声だけで五年間もさぼっている現状を黙視することを得ず、こういう次第となった」と鈴木らへの競争心を滲ませながら翻

訳の経緯を述べている³⁶⁾。

『世界革命運動情報』は、「第三世界」をはじめ世界各地のラディカルな運動を紹介することを目的に、当初は4、5人程度の少数の活動家・知識人らの編集によって、1967年に東京で創刊された。創刊号の編集後記には雑誌の目的が以下のように記されている。「世界の革命運動のインフォメーションを数多くとらえ、研究してゆこうという立場から、本誌は発行された。それは同時に『世界革命』の立場に立つ運動の紹介、研究という意味を持っている」³⁷⁾。編集グループのメンバーの大半は30代の経験豊かな活動家で、以前は日本共産党の党员だった者も多く、広い意味での日本のニューレフトに含まれる。ただし、この雑誌の編集部である「レボルト社」を結成した時点でそのメンバーの多くは、当時少数派であったアナーキズムに傾倒している者が多かったのも特徴的と言える。

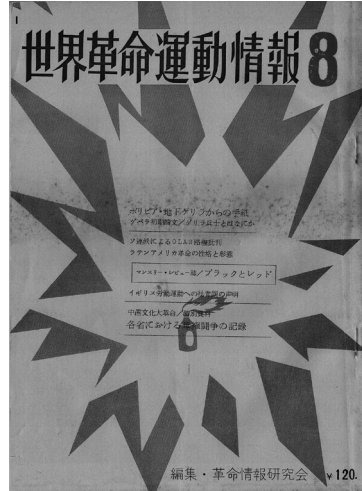


図2 『世界革命運動情報』表紙

この雑誌は、1938年に世界革命を目指して設立された社会主義の国際組織「第4インターナショナル」の日本代表であった太田竜が、欧米やアジアの地下出版社から入手した論文を翻訳しそれを掲載することから始まった³⁸⁾。これらの外国語論文は、原著作者から著作権の許諾を得ることなく翻訳出版されていた。それは、『著作権法』といった朽ち果てた制度は全く無意味なものとなり、文化の分野における革命的思想の発展のためには全くの障害とすらなっている」というハバナ文化会議の予備報告が謳うテーゼに則ったことだったという³⁹⁾。当時発行されていた他の多くの地下出版物と同様、この雑誌も僅かな発行部数でスタートした。しかし、転機は創刊から間もなくして訪れる。それは「二つ、三つ・・・無数のベトナムをつくれ、これが合言葉だ」という有名な文句を含んだいわゆる「ゲバラ・アピール（英題：

Message to the Tricontinental)」の翻訳掲載がきっかけだった⁴⁰⁾。スペイン語で書かれた原文は、トリコンチネンタル会議 (Tricontinental Conference) の後に設立されたキューバの政治運動「アフリカ・アジア・ラテンアメリカ人民連帯機構」(OSPAAAL: Organizacion de Solidaridad con los pueblos de Asia Africa y America Latino) の執行事務局によって1967年4月16日にはじめて公表された。しかし、1967年5月に出版された第3号に掲載された日本語訳は、原文からでなく、1963年から1968年にかけてフランスの第4インターナショナル連合事務局、後にニューヨークの米国社会主義労働者党が発行していた出版物 *World Outlook* に掲載された英語訳を元にしていた⁴¹⁾。この日本語版は、重訳にも関わらず、キューバでの原著出版からわずか1カ月ほどで日本の読者に届けられた。ゲバラのメッセージは7頁にも及び、そのメッセージの力強さに加え、「日本」が文中に5回も登場したことから、多くの日本人活動家たちを惹きつけることとなった。ゲバラの翻訳の掲載は自ずと全国の活動家から評判を呼び、通信販売や一部の個人書店でしか手に入らない雑誌にもかかわらず、第3号だけで約6,000～7,000部の売り上げを記録したという⁴²⁾。1960年代後半になると、学生活動家たちは次第に海外の動向にも関心を示すようになったが、生の情報を得ることは容易ではなかった。ゲバラの論考で注目を集めた『世界革命運動情報』は、やがて若い活動家たちが海外の運動、特に「第三世界」の運動について学ぶ際の重要な参考誌となった。中心メンバーの一人は後に、レボルト社は、「新左翼の国際部門をまとめて代行する場所」を目指していたと語っている⁴³⁾。

もちろん、海外の運動に関する情報は、『朝日ジャーナル』『世界』『中央公論』『展望』『現代の眼』など、より一般向けで発行部数も多い言論誌でも扱われていた。しかし、レボルト社が翻訳した情報は、より深く専門的なものであっただけでなく、「世界革命」実現のために、「第三世界」を中心とした海外の運動を学ぶという明確な目的も持っていた。実際、彼らが「反乱のための集団」を意味する「レボルト社」と名付けたのは、革命にいたるまでには「反乱 (revolt)」が不可欠と考えたからである。そして反乱を起こすためには、情報を集め、交換し、また拡散していくことが必要だという信念があった⁴⁴⁾。

このラディカルな革命への熱意こそが、レボルト社による「第三世界論」の解釈と、先に論じたベ平連に近い知識人たちによるそれとの決定的な差となった。例えば、ファノンの「暴力について」の解説を寄せた松田政男は、その中で、鈴木や海老坂のファノン評を「虚像」と断じている⁴⁵⁾。松田は、彼らのファノン評が、サルトルなどヨーロッパの知識人の思想と比較する、過度に学術的なものであると評した。その上で、松田は、ファノンの思想を純粹に「革命のための情報」として伝えることの意義を強調した⁴⁶⁾。

ただし、鈴木も、松田による自身のヨーロッパ中心主義的な考え方への批判を自覚していないわけではなかった。そして、むしろ西洋こそが、自分とファノンを結びつける重要な鍵であると反論している。鈴木もまた、フランスに留学していた学者として、「己を一旦西欧に譲渡した身」であり、それ故に同じく「ファノンが西欧を通してアルジェリア革命にその行動を切り開いて行った軌跡に惹かれ」たのであったと述べている⁴⁷⁾。要するに、西洋を経由して反西洋の思想を取り込んでいくことが重要だと考えたのである。西洋経由の非西洋への接近は、ベ平連に集った知識人たちに共通して見られる方向性であり、松田を含めた「ラディカル派」との違いが顕著に表れた点でもあった。他方、松田による鈴木と海老坂へのもう一つの批判、即ち彼らのマジョリティ且つエリート的な属性の問題は、よりのを得たものだったと言える。それは、海老坂がファノンの作品を翻訳する際に生じた心の葛藤からも見てとれる。

白くはないものの黒くはない皮膚に包まれ、飢えの恐れもなく地に呪われてもおらず、もちろん植民地化の苦しみをなめたこともなく、日本社会で暮らしているかぎりには差別の対象になることもなく、要するにぬくぬくと生きている私に、また革命の理論家でもなく第三世界の専門家でもなく、だいたいフランス語の活字に基づいて少々のことを考えているにすぎない私に、どれだけファノンを語れるだろうか、またファノンをとおしてどれだけ第三世界の思想に垂針（原文ママ）をおろすことができるだろうか、と⁴⁸⁾。

世界における自身の立場の相対的優位性を自覚する海老坂にとってファノンの翻訳は負い目を感じながらのものであった。後述するように、松田にもこうした葛藤がなかったわけでないが、その生い立ちから自身をファノンを結びつける強い動機と渴望があった。市民派知識人とラディカル派知識人のあいだのファノンの翻訳をめぐる闘争と緊張は、決着がつくことはなかったものの、それは日本と「第三世界」のつながりをめぐる議論の重要な端緒となった。また他方で、松田やレボルト社によるファノンのよりラディカルな解釈の水脈は、ある種の政治的帰結をもたらした。彼らは1972年に『世界革命運動情報』の出版を停止したが、幸か不幸かその革命精神は、雑誌の若い読者に受け継がれていった。それは、その後の日本のパブリクスにおける戦争責任やネオ・コロニアリズムへの政治的議論の下地を作ったと同時によりラディカルで暴力的な運動への影響もあった。1972年から1974年にかけて、反帝国主義の視点から、アジア諸国に経済的侵略をおこなっていると見做された日本企業に爆弾闘争などを仕掛けた東アジア反日武装戦線の中心メンバーも『世界革命運動情報』の読者であり、レボルト社の主催する会合や研究会にも時折参加していた⁴⁹⁾。また、日本赤軍のリーダーであった重信房子も、1972年にパレスチナ闘争の加わるためにバイルートへ渡航する前、頻繁に編集部を訪れパレスチナ問題についての資料を熱心に読んでいたという⁵⁰⁾。こうして、日本における「第三世界論」のラディカルな思想的展開は、現実世界においても、国境を超えた政治的实践へと結び付いていった。

4 「第三世界」との連帯の可能性と不可能性

これまで述べてきたように日本において「第三世界」概念／「第三世界論」は、1960年代半ばに導入され、1970年代に一種のブームを迎えた。それは、フランツ・ファノンの翻訳をめぐる対立や競争を経て展開されていった。それでは、「第三世界論」に触れた日本の知識人・活動家たちはそれをどのように解釈し、自らの思想へと昇華させ、社会運動の実践へと結びつけていったのだろうか。こうした問題を考えるにあたって、まず、当時の日本の社会

構造を「三つの世界モデル」との関係から確認する必要がある。その上で、そうした構造がどのように日本の知識人・活動家の「第三世界論」の解釈に影響を与えたのかを考察していきたい。

バンドン会議に参加した1950年代半ば以降、戦後復興を成し遂げた日本はさらなる経済発展を遂げた。その結果、1964年には「第一世界」の政府間経済組織であるOECDへの加盟を果たすことになった⁵¹⁾。そして、まさに60年代運動が最高潮を迎えようとしていた1968年には、国民総生産(GNP)でアメリカに次いで世界第2位に躍り出た。こうしてみれば、確かに当時の日本は、非西洋圏で唯一の「第一世界」の国としての地位を築き、日本人は「豊か」になった。しかしそれと同時に世界システムの中での位置が上昇するにつれ、日本人は新たなアイデンティティの問題を抱えるようになった。即ち、西洋列強に追いつき追いつくことを目標に掲げた日本の近代化プロジェクトが、少なくとも経済的には達成されようとする中で、世界における日本の位置やあり方を問いなおす必要が生じてきたのである。「三つの世界モデル」は、世界における日本の立ち位置を改めて捉え直すための有効なツールとして機能したと言える。

繰り返しになるが、ソーヴィエをはじめとしたフランスの社会学者が提唱した「第三世界」概念は、決して中立的なものではなかった。それは、歴史的に植民地であった社会を管理しながら文明化するという規範的使命と政治的意図をともなった西洋中心的な近代化の世界観に基づくものであった。その意味で、1960年代半ばからジャーナリストや知識人を中心とした日本における「第三世界」概念の流行は、一方で西洋の「第一世界」の「眼差し」から「第三世界」を「他者化」し、自分たち日本人と「第三世界」のあいだに境界を設定する無意識の近代主義的願望の表れとして解釈することができる。しかし、他方で、ソーヴィエらの社会科学的な「第三世界」とは異なる意味を含んだファノンによる「第三世界論」は、日本の活動家をこれとは逆の方向へと向かわせた。1960年代後半から、特に1967年10月のチェ・ゲバラ死去の発表以降、ソ連共産主義へのオルタナティブとして「第三世界」と

のトランスナショナルな連帯が、「第一世界」の多くのニューレフトのあいだで強く意識されるようになった。日本の活動家も例外ではなかったが、こうした衝動を覚えたのは、必ずしも左派の活動家たちだけではなかった。「第三世界」との連帯は、より広く非西洋に属する日本人のあいだに特有の感情を喚起した。例えば、日本のリベラル知識人の那須国男と「第三世界」の象徴的指導者であったセネガル大統領レオポール・セダール・サンゴールの対談が示すように、日本人が自分自身を「第三世界」の一部と考え、また他者からもそう見られることに嬉しさを感じるがあった。1967年12月にダカルで開催され第2回国際アフリカ研究家会議（Second International Congress of Africanists）の演説で、サンゴールが「第三世界の文明の創造」を訴えた後、那須はレセプションの席において、大統領にサンゴールの言う「第三世界に日本を入れて考えているのかどうかを聞き、もちろんという答えを得た」ことを嬉々として紹介している⁵²⁾。

あえて大雑把に論じるとするならば、「第三世界」という概念の曖昧さと「3つの世界モデル」における日本の複合的な位置によって、日本には西洋の「第一世界」により同一化する者と非西洋の「第三世界」に強いシンパシーを感じる者がいた。ただし、「第三世界」の政治闘争に対する共感の広がりの方で、市民運動派やラディカル運動派の思想家・活動家の中には、日本や欧米において「第三世界」との連帯の意識が生まれつつあることに少なからぬ違和感を感じる者たちもいた。このラディカル運動派には、映画評論家でレボルト社の中心人物の一人でもあった松田政男がいる。松田は、日本における「第三世界」情報のブローカー的役割を担っていたが、意外にも当時「第一世界」のニューレフトのあいだで流行しつつあった「第三世界」とのトランスナショナルな連帯については、批判的な態度をとっていた。松田は1968年6月発表の評論「永久革命における現代」において、「アフリカ・アジア・ラテンアメリカ人民連帯機構」の機関紙である *Tricontinental* 誌（第1号）に掲載されたストークリー・カーマイケル（Stokely Carmichael）の「第三世界」に関するエッセイを読んだ際の衝撃を吐露している⁵³⁾。アメリカ資本家の「第三世界」に対する搾取を糾弾するカーマイケルのメッセージに

全面的に賛同しながらも、そこに記されていた「第三世界－わが世界（The Third World - Our World）」というフレーズを見て慄然としたという。それは、カーマイケルに対する批判ではなく、「第三世界」がもはや日本という「わが世界」と接続し得ないことを悟った嘆きであった。それは、「第三世界」の思想家や運動を通じて「第三世界論」を学ぶうちに、「第三世界」の人々にとって一義的な価値である「大地へのやみがたい希求」を日本人が近代化の道をひた走ってきた結果として「見事に喪失してしまっている」ことに気づいたからである。松田は、「私たちは、存在として、まず＜第三世界＞への反革命の側に立ってしまっていることを苦痛にみちた事実として確認することから始めなければならない」と断じた。更に、ファノンの著作名『黒い皮膚・白い仮面』を意識した表現を用い「私たちは、私たちの黄色い皮膚をパスポートとして、ヨリ白い世界へとのもりこんでしまっている」という「日本人」としての厳しい自己批判を展開している⁵⁴⁾。

日本人が「第三世界」に対して「反革命的」であるという松田の認識は、自ずと自身の日本帝国主義に対する批判意識を高めた。ただし、それと同時に松田の批判の矛先は、「三つの世界モデル」の中での自らの位置づけを考慮することなく、安易に「第三世界」との連帯を求める多くの日本の左派活動家たちへも向けられた。先に論じた1967年の「ゲバラ・アピール」以降、日本のニューレフトの多くが「第三世界論」を各々のマルクス主義革命論に取り込んでいった。その結果、日雇い労働者が集中する山谷地区などの都市空間を「日本における第三世界」と呼んで活動をはじめた者も出てきた⁵⁵⁾。こうした流れに対して、松田は、世界的な視点から見れば自分たち日本人が「加害者」側に位置することを深く認識することなく、安易に「第三世界との連帯」を表明する日本の新左翼活動家のメンタリティに批判と懐疑の念を抱いていた⁵⁶⁾。

「第三世界」との連帯に関するこうした松田の特異な感性の背景には、自身の複雑な多民族的出自と、植民地台湾で生まれ育った経験があった。松田は幼少期を日本人入植者の家族の一員として過ごしたが、その地位は曖昧で、

松田自身の言葉を借りれば「二級の入植者」であった⁵⁷⁾。父親は日本人だったが、松田は父の名前さえも知らず、「父無し」として育った。母親は沖縄の小さな島の出身で、日本本土から歴史的に虐げられてきた「非日本人」である。しかし、母親は松田を植民地時代の台湾でも、終戦後に生活をはじめた日本本土でも松田を「日本人」として育てた。松田は母親とともに「祖国沖縄を憎む」気持ちを強く持ち、自身のアイデンティティの一面を抑圧することで「純粋な日本人」であろうと努めた⁵⁸⁾。つまり、幼少期において松田は母親とともに「第一世界」の住人となることを強く意識し、自分たちの中にある「第三世界」を徹底的に否定したのである。その後30代半ばに「第三世界論」に出会い、自身の沖縄アイデンティティに対する認識を改めることになる。しかしながら、こうした自身の経験から「第三世界」との連帯は安易に達成できるものではなく、内的な苦悩を経なければ到達できない険しい道のりだという認識を強く抱いていた。

こうした自身のアイデンティティから、松田の内面では、「第三世界」との連帯を求める熱意と、松田の展開する論理とのあいだに、深刻な矛盾が生じていた。そのため、いかにしてその矛盾を克服し、「第三世界」との「真の連帯」ができるかを模索する必要があった。松田が、はじめに「第三世界運動」との安易な連帯を非難する論考（「永久革命における現代」1968年6月発表）を執筆した際、基本的には、松田はソーヴィエトに由来する政治的、経済的分類に基づいて世界を三分する社会科学的な「第三世界」理解ののちで論を展開していた。しかし、この社会科学的理解を基に「第三世界」を実際の空間としてとらえると、日本はその経済的地位と政治体制によってそこから排除されることになる。では、果たして日本はどのように「第三世界」と同じ土俵に立ってつながることができるのか。松田は、こうした問題を打開するために「第三世界」の発想の転換を図った。

松田は次第にファノンの思想にインスピレーションを受けて、「第三世界」を「呪われた地」であり、また「私怨の空間」であると解釈するようになる。それは、「第三世界」を物理的、実質的な空間としてではなく、すべての地

理区分を超える「架空の世界」としてとらえ、世界に散らばる反乱のための兵士たちを団結させようとしたのである⁵⁹⁾。その際に人々と「第三世界」とを結びつけるものは、世界に対する「私怨」であると考えた⁶⁰⁾。ファノン『地に呪われたる者』の中で、基本的に「第三世界」を実在する地理的空間を指し示す言葉として使っていた。それに対して、松田は、どんな地域や民族的背景を持つ人でも「第三世界」の一員となりうるように、「第三世界」を物理的空間から認識論的に切り離した。そして「第三世界」とは「世界の辺境で、名も無き大衆として歴史の最下層に沈殿してきた人びとが、自己の運命の同一性を直感的に把握し、戦闘を開始する時の高らかなる号砲」であるという独自の解釈を展開した。松田自身も持っていた世界に対する敵意、憎しみ、怨念だけが「第三世界」という想像の共同体に入るために必要なチケットとして考えられたのである。このような政治経済構造や地理的文化的区分とは異なる感情や意識に基づいた独自の「第三世界」解釈は、松田自身の複雑なアイデンティティというミクロな条件と世界における日本のアンヴィバレントな立場というマクロな構造的な位置とが相まって生み出されたものであった。また松田は、「私怨」を表現する手段としての暴力を正当化する文章も書いている⁶¹⁾。そのため、松田は非暴力直接行動を基本とするベ平連のメンバーから厳しい批判を受けた。活動家で政治理論家の武藤一羊は、松田の「私怨」と「暴力による革命」という考えは幻想に過ぎず、松田は自身の内面的・個人的闘争に固執してしまっているため、自身の考えや戦略が持つ実際の社会を変える「効果」に無頓着だと厳しく非難している。プラグマティズム的な立場に立つ武藤はにとって松田の思想は「非現実的」であり、その現実世界の状況に対する認識や感受性の欠如のため、それは危険であると考えられたのである⁶²⁾。

暴力を社会運動のレパートリーの一つとして採用すべきか否かと言う問題は、ベ平連の市民運動とレボルト社のラディカル運動のメンバーを分つ決定的な要因であり、対立は解消されることはなかった。しかしながら、他方で、両グループのあいだには共通する部分も少なくなかった。実際に、松田が表明した「第一世界」と「第三世界」との安易な連帯に対する違和感は、ベ平

連のリーダーの言説にも見られた。作家で反戦活動家の小田実は、その設立から解散までの9年間にわたってベ平連を率いた。「第三世界」にも強い関心を示し、1970年には世界中の「第三世界」の活動家や知識人の翻訳論文を集めた『第三世界の革命』と題する本も編纂している⁶³⁾。ただし、小田は、世界各地で生じている革命について、単に記事を読むのではなく、旅をして、現地の人々との交流によって学ぶことを好んだ。ベ平連運動の初期は、北米や西ヨーロッパなど欧米が渡航先の中心だったが、1960年代後半からは、「第二世界」、「第三世界」もその目的地に加わった。例えば、1968年の春から夏にかけての旅では、ソ連からチェコスロバキア、スウェーデン、イギリス、フランス、インド、カンボジア、北ベトナム、ラオスを約4カ月かけて回っている⁶⁴⁾。

小田の旅の第一の目的は、ベトナム反戦運動のための国境を越えたネットワークを構築することだった⁶⁵⁾。しかし、作家・思想家としてのもう一つの目的は、世界各地の人々の世界観の違いを探り、彼らが日本をどう見ているかを理解することにあった。そして、こうした旅を通じて、小田は日本人が持つ一つの特権に気がつく。それは、日本人が「第三世界」と「第一世界」のアイデンティティを行き来できることであった。例えば、小田のキューバ旅行記にはこのようなエピソードが記されている。ある日本人がキューバを訪れた際、現地の農民から「おまえたちはえらかったな、あんなに〔太平洋戦争中〕アメリカをやっつけたではないか」と褒められると、「第三世界」の一員であるかのように感じ、うれしくなる。しかし、別の場面では、同じ日本人が日本大使館のパーティーか何かで自らをアメリカに同一化し、キューバには「自由がない」「アメリカはわるいことはいくらでもやっているが、しかし、自由がある」などと話していたりする⁶⁶⁾。このように小田は、アメリカとキューバのはざまに置かれた日本人の独自の、ただし、都合の良い立ち振る舞いを紹介している。ここで取り上げられている「日本人」が小田自身のことなのかは定かではない。だが、少なくとも小田が「三つの世界モデル」における日本人のアンビヴァレントな位置を十分に認識していたことが読み取れる。

他方、ベトナム反戦運動への積極的な関わりから「第三世界」をより深く理解し、またつながりを強めていく中で、小田は次第に、日本人である自分は「『第三世界』の外にいる人間だ」という確信を強めていった⁶⁷⁾。こうした確信は、先に論じた松田の認識と同じくしている。確かに、日本が「第三世界に属さない」という気づきに対して、小田の語りには、松田ほどの大きな失望は見られない。小田と松田はともに1930年代前半に生まれた同世代という共通点はあるものの、小田は松田のように入植者として育ったわけでも複雑な民族的背景を持っていたわけではなく、自らの人種的アイデンティティを意識させられたのは20代前半にフルブライト奨学生としてハーヴァード大学で学んだ時であった⁶⁸⁾。こうした生い立ちと趣向の違いが両者に、感情的な差異をもたらしてはいるものの、小田の認識は、松田が訴えた「日本人が第三世界と『真に連帯する』ための困難」と共鳴するように見える。

松田と同様、小田も「第一世界」と「第三世界」との「正しい」連帯の方法に思い悩んだ。松田は、「私怨」という意識を自身の内面に見出すことで、想像の「第三世界」に入場するための切符を手に入れようとした。小田もまた、やや異なる視点から自身の中の「第三世界」を見出すことに解決策を求めた。小田は、日本人を含めた「第一世界」が「第三世界」と連帯する際に最も重要なことは「第三世界」が抱える問題が自分たちの中にもあるという前提に立つことであると考えた。逆に、小田が断固として拒否したのは、観察者の立場を特権化することであった。こうした小田の意識は1968年のキューバ滞在をもとにした論考からも見てとれる。小田は、滞在中に「第三世界」に対して強いシンパシーを持った「第一世界」の人々と多く出会った。その中で、西洋から来たある若い学校教師が、「キューバを助けようと思って来た」と小田に言ったという。その言葉に対して小田は「キューバはきみの助けを必要としていないかもしれないな」と言い放った。しかし、その教師は「まだまだキューバは助けを必要としている」と反論した。そして、キューバは「まだまだおくられているんだよ」と付け加え、キューバに欠けている基本的人権の必要性を説いた⁶⁹⁾。

小田は、こうしたやりとりを振り返って、人権の必要性について頭では納得する部分もあったものの心情的には不満が募ったと述べている。小田が抱いた違和感は、「第一世界」の価値観を「第三世界」に対して上から目線で教え、説教するように見える教師の姿勢だった。「第一世界」の繁栄は、「第三世界」を踏み台にして成り立っているという歴史的事実を認めないまま、キューバに西洋の概念を持ち込もうとしている、というのが小田の見方であった。従って、「第一世界」が「第三世界」に人権といった自分たちのイデオロギーを持ち込もうとする際、重要なのはそれを押し付けることではなく、その地域の置かれているきびしい状況を理解した上でそれを差し出していくことである。つまり、「第一世界」は、「第三世界」のそれぞれの国の複雑な状況に対して、人権が本当に意味するものを苦悩しながら見出してはじめて、自分たちの価値観を差し出す権利を持つと考えた。小田は、そのような努力と犠牲を「手数料」と呼び、「手数料」を支払わずして「第一世界」の人々が「第三世界」の人権の欠如を批判する権利はないと断じた⁷⁰⁾。

小田は、1968年の段階で既にベトナム反戦運動を通じて多くの欧米の活動家たちと出会い、対話を重ねていた。そうした具体的な経験から生じた違和感がもとなつて独自の思想へと昇華させていった。「第三世界」に最も近い「第一世界」の住人として、具体的なレベルで「第一世界」の人々の素朴な善意を批判していったのである。それに対して松田は、多くの国外の運動の情報や思想に触れてはいたものの、国境を越える運動の実践経験は豊とは言えなかった。松田は、「私怨の空間」という想像の共同体を設定することで、国民国家の境界を理念的に乗り越えていったが、こうした思想は、小田に比べてラディカルではあるものの、その理念とは裏腹に、政治実践という意味での有効性に乏しかった。松田は1973年に革命的な地下活動に従事するためにパリへ渡ったが、1年ほどでフランスの秘密警察に捕まり強制退去をさせられた⁷¹⁾。後にその経験を「僕は、73年秋からパリにいて結局ほとんど何もできなかったわけだが、僕が目論んでいたのは、アラブ・アフリカ人の労働総同盟をヨーロッパに作ることだった。実際にはリヨンあたりの中華料理屋みたいなところで、アラブ人の労働運動の長老みたいなおっさん

と片言の英語で話するぐらいが関の山だったんだけど」と語っている⁷²⁾。

こうしたように国民国家を超えた連帯という意味では、小田の方が松田よりも、資本も経験も豊富であり、それ故、その困難と可能性に対して、実践的で豊かな思想を生み出すことができた。しかし他方で、「民族」を超えるという意味でのトランスナショナリティについて言えば、松田の方が小田よりも感性が鋭かったとも言える。小田の語りには、「日本人」という自らのナショナルなアイデンティティへのゆらぎは見られない。むしろ、「世界の中での日本」というアイデンティティの問題は、小田のトランスナショナルな実践における一貫した問題意識であった。しかしながら、自身が「日本人である」という感覚については、所与のものとして疑われることはなかった。それに対して、松田には、日本人と沖縄人の「ハーフ」としての出自、そして植民地・台湾において「二級の植民者として、同時に二級の原住民として、奇妙な混淆を経験」したことも重なって、「民族」の面においてもハイブリッドな意識が潜んでいる。自身が「沖縄の皮膚・日本人の仮面」と形容するこうした入り組んだ属性が、より強くラディカルに「民族」をも超えた連帯を希求する意識へと結びついていったと考えられる。

5 おわりに

奇しくも 1968 年は、日本の集中的な近代化計画が開始された明治維新（明治元年）からちょうど 100 年目にあたる年だった。またその年は、敗戦後の日本が再び新たな近代化の道を歩み、果敢に経済を発展させた結果、世界システムの中心に躍り出た年でもあった。しかしながら、同じくその年に政治の季節はピークを迎え、また、フランク・ファノンの翻訳に代表されるように「第三世界論」というそれまでの西洋をモデルとしてきた日本の近代化を否定する思想が日本に流入してきた。本稿が論じてきたのは、こうした 100 年にわたる近代化に突き進んでいた最中、突如として現れた西洋近代批判の思想に会った際の日本人の戸惑いであった。

それは、ようやく山頂に辿り着いたと思った途端に、「山に登る必要なんてなかったのだ」と指摘された際の衝撃のようなものと言えるかもしれない。鈴木や海老坂によるファノンの翻訳をめぐる葛藤には、こうした戸惑いが垣間見える。山頂への道のりは長く険しく、その中で人々は、新たなものを発見し、多くの経験を得た。しかし、気がつけば、山のふもとの故郷は朽ち果てていた。松田の嘆きは、山頂を躍起になって目指し、いつの間にか故郷がなくなっていたことに気づいた際の衝撃だった。ただし、山の麓には、まだ他にも多くの困っている村が残されていた。村人たちの飢饉を救うために山頂までの道のりで見つけた珍しい木の実や山菜を持って出かけるものたちがいた。小田が指摘したのは、木の実や山菜を渡したとしても意味がないということだったのかもしれない。自身の故郷の苦境を思い出しながら、木の実ではなく種を差し出し、そして木が育つ方法を共に探っていく。そうすれば人は故郷を離れずに豊かになれる、そんな思いだったようにも想像される。

本稿で論じた「第三世界」／「第三世界論」との出会い、同時代の社会運動の大きなうねりと共鳴しあい、その後の日本の市民社会をポスト・コロニアルの問題へと導き、またアジアとの新たな関係を作るきっかけを生み出した。その意味では、重要な思想的転換であり、松田や小田の思想には、西洋「第一世界」とも非西洋「第三世界」とも異なる独自性があったと言える。こうした「第三世界論」をめぐる国境を超えたつながりの検証からは、1968年前後の「トランスナショナルな日本のカタチ」の一側面が浮かび上がってくる。しかしながら、最後に改めて強調すべきは、こうした独自性は、「第一世界の中の（唯一の）非西洋国」という当時の特異な構造的位置によって生じたという点である。そして、その「日本のカタチ」は、一過的な儚いものだった。それは、冷戦の崩壊にともない、「三つの世界論」の影響力が低下していったという言説のレベルに留まらず、日本のバブル経済の崩壊と、近隣のアジア諸国の目覚ましい政治経済的な台頭によって、「第一世界の中の（唯一の）非西洋国」というアイデンティティがじょじょに崩れ去っていったからである。

註

- 1) Arendt, Hannah, *On Violence*, London, UK: Penguin Classics, 2023. (山田正行訳『暴力について—共和国の危機』みすず書房、2000年、115頁。)
- 2) この会議は、資本主義・社会主義両体制に中立的な国家が集まって結成されたとして一般に考えられているが、実は冷戦構造の中に深く入り込んでいた。中国も招待されていたため、日本は資本主義圏の擁護者としての役割を担い、会議の中で共産主義中国の影響力を弱めることが期待された——宮城大蔵『バンドン会議と日本のアジア復帰』草思社、2001年、146頁。
- 3) 「バンドンの日本人」『朝日新聞』1955年5月2日号、2頁。
- 4) ここでの時期区分は、歴史家フレデリック・ジェイムソン (Frederic Jameson) が提唱した「長い60年代 (the long sixties)」に倣っている——Jameson, Frederic “Periodizing the 60s,” *Social Text*, 9/10, 1984, pp.178-209.
- 5) 米国の例としては以下を参照——Young, Cynthia A., *Soul Power: Culture, Radicalism, and the Making of a U.S. Third World Left*, Durham, NC: Duke University Press, 2006; Varon, Jeremy, *Bringing the War Home: The Weather Underground, the Red Army Faction, and Revolutionary Violence in the Sixties and Seventies*, Berkeley, CA: University of California Press, 2004; Seihman, Sarah, “Tricontinental Routes of Solidarity: Stokely Carmichael in Cuba,” *Journal of Transnational American Studies* 4 (2), 2012. ヨーロッパの事例については以下を参照——Slobodian, Quinn, *Foreign Front: Third World Politics in Sixties West Germany*, Durham, NC: Duke University Press, 2012; Wolin, Richard, *The Wind from the East: French Intellectuals, the Cultural Revolution, and the Legacy of the 1960s*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 2012; Kalter, Christoph, *The Discovery of the Third World: Decolonization and the Rise of the New Left in France, C. 1950-1976*, New York, NY: Cambridge University Press, 2016; Hendrickson, Burleigh, “March 1968: Practicing Transnational Activism from Tunis to Paris,” *International Journal of Middle East Studies* 44 (4), 2012. また、60年運動との直接的な関係は薄いですが、1950年代から70年代にかけての西ドイツ・東ドイツ両国の「第三世界」とのつながりをトランスナショナル・ヒストリーの視点から比較・分析した著作に以下がある——Hong, Young-Sun, *Cold War Germany, the Third World, and the Global Humanitarian Regime*, New York, NY: Cambridge University Press, 2015.
- 6) 「第三世界」内部の連帯に関する研究では以下がある——Christiansen, Samantha, and Zachary A. Scarlett, eds., *The Third World in the Global 1960s*, New York, NY: Berghahn, 2012; Parrott, Joseph, and Mark Atwood Lawrence eds., *The Tricontinental Revolution: Third World Radicalism and the Cold War*, New York, NY: Cambridge University Press, 2023. また、チェ・ゲバラが「第一世界」と「第三世界」の双方に与えた影響について論じた以下の研究がある——Jeremy Prestholdt, “Resurrecting Che: Radicalism, the Transnational Imagination, and the Politics of Heroes,” *Journal of Global History*, 7, 2012. そして「第一世界」と「第三世界」並びに「第三世界」内部の連帯について、反戦とフェミニズム運動の視点から描いた研究としては以下が挙げられる——Wu, Tzu-Chun, *Radicals on the Road: Internationalism, Orientalism, and Feminism During the Vietnam Era*, Ithaca, NY: Cornell University Press, 2013.
- 7) 日本研究について言えば、以下の研究は、「第三世界」という言葉使われていないもののアフリカ・アジア連帯の中に日本の60年代運動位置付けた貴重な先行研究である——Onishi, Yuichiro, *Transpacific Antiracism: Afro-Asian Solidarity in 20th Century Black America, Japan and Okinawa*, New York, NY: New York

University Press, 2013.

- 8) 本稿と同じく戦後日本の知識人が持つアンビヴァレント（両義的）な意識を分析したローレンス・オルソンの仕事がある。ただし、本稿では、同書が描いたナショナル・アイデンティティの再構築ではなく、日本人のトランスナショナルな実践にともなう、両義的なアイデンティティを扱う——Olson Laurance, *Ambivalent Moderns: Portraits of Japanese Cultural Identity*, Rowman & Littlefield, Lanham, MD, 1992. (黒川創・北沢恒彦・中尾ハジメ訳『アンビヴァレント・モダンズ——江藤淳・竹内好・吉本隆明・鶴見俊輔』新宿書房、1997年。)
- 9) 例えば、ラテンアメリカ諸国は、開発の程度で言えば、当時「発展途上」に分類されることが多かったが、文明としては、西洋文明に位置づけられており、また第二次世界大戦後に独立を果たしたばかりの多くのアジアやアフリカの国々と比べると、西洋によるラテンアメリカ諸国の植民地支配からの独立は時代的にだいぶ遡る。
- 10) ここで言う「トランスナショナルな日本研究」については、以下を参照——高田圭「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』20号、2023年。
- 11) こうした手法は、歴史社会学で言うところの「マクロ・ミクロ・リンク」と言える。
- 12) 筆者は、以前グローバルに60年代運動を展開した日本の活動家を「市民運動派」と「ラディカル派」に分けて考察した。両者の違いは、活動家たちの政治文化（イデオロギー・ハビトゥス・階級意識等）に起因する。詳細な分析は以下を参照されたい——Takata, Kei, “Connecting with the First or the Third World?: Two Paths Toward the Transnational Network Building in the Japanese Global Sixties,” *Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements*, 63, 2020.
- 13) 以下を参照——Berger, Mark T., “The End of the Third World?,” *Third World Quarterly*, 15 (2), 1994; Berger, Mark T., “After the Third World? History, Destiny and the Fate of Third Worldism,” *Third World Quarterly*, 25 (1), 2004. また、21世紀の「第三世界論」の意義に関する議論は、以下を参照——Dirlik, Arif, “Spectres of the Third World: Global Modernity and the End of the Three Worlds,” *Third World Quarterly*, 25 (1), 2004.
- 14) Sauvy, Alfred, “Trois mondes, une planète” In: *Vingtième Siècle, revue d'histoire*, n° 12, octobre-décembre 1986. Dossier : Retour au tiers monde.
- 15) Parlieraki, Eugenia, “The Origins of the ‘Third World’: Alfred Sauvy and the Birth of a Key Global Post-War Concept,” *Global Intellectual History*, 2023.
- 16) Kalter *ibid.* (note 5), p.44.
- 17) Berger, Mark T. 1994 *ibid.* (note 13), p. 259.
- 18) フランツ・ファノン、鈴木道彦・浦野衣子訳『地に呪われたる者』みすず書房、2021年、312-3頁。
- 19) Kalter, Christophe, “From Global to Local and Back: The ‘Third World’ Concept and the New Radical Left in France,” *Journal of Global History*, 12, 2017, p.120.
- 20) 以下を参照——Christiansen and Scarlett *ibid.* (note 6), p. 4.; Berger, Mark T. 2004 *ibid.* (note 13), p. 11.; 菅孝行「第三世界論の登場とその帰趨」『現代の眼』1977年10月号。
- 21) Prashad, Vijay, *The Darker Nations: A People’s History of the Third World*, New York, NY: The New Press, 2007, p. xvii.
- 22) Gitlin, Todd, *The Sixties Years of Hope, Days of Rage*, Toronto, CA: Bantam Books, 1993. (正田三良・向井俊二訳『60年代アメリカー希望と怒りの日々』彩流社、1999年、371頁。)
- 23) この数字は日本記事データベース CiNii (<http://ci.nii.ac.jp>) より、筆者が算出し

- たものである。5誌とは、『世界』『中央公論』『朝日ジャーナル』『現代の眼』『展望』である。
- 24) 『中央公論』に掲載された「第三世界の始まりと中国の岐路」が最初の論考と考えられる。
 - 25) 例えば、1943年の著作 *La population, ses lois, ses équilibres* は『人口—その法則と均衡』、同じく1943年の *La prévision économique* は『経済観測』としてそれぞれ白水社から翻訳出版されている。
 - 26) 那須国男「第三世界文明の精神」『日本読書新聞』1968年2月26日号、1頁。
 - 27) ただし、ファノンの立場は他の「第三世界」の人物たちとはやや異なり、その役割は政治的指導者というよりも、学者・作家であった。そのため、ゲバラや毛沢東に比べると、大衆的な人気は低く、知名度もそれほど高くはなかった。しかし他方で、ファノンは世界中のニューレフト思想家たちに、とりわけコロニアル理論やマイノリティ政治に関する深い知的洞察を提供したと言える。
 - 28) 海老坂武『かくも激しき希望の歳月 1966～1972』岩波書店、2004年、24頁。
 - 29) ファノン・フランツ・海老坂武・加藤晴久・鈴木道彦・浦野衣子訳『フランツ・ファノン集—黒い皮膚・白い仮面、地に呪われたる者』みすず書房、1968年。ファノンの他の著作『革命の社会学—アルジェリア革命第5年』（原著1959年）と『アフリカ革命に向けて』（原著1964年）も、1969年に出版され、1960年代後半に一気にファノンの翻訳が進んだことが分かる。
 - 30) 菅前掲稿（注20）33頁。
 - 31) 天野恵一「『第三世界主義』と現在—その闘いになぜ心が躍らなかったのか」東アジア反日武装戦線への死刑重刑攻撃とたたかう支援連絡会議編『あの狼煙はいま』インパクト出版会、1996年、166頁。
 - 32) ジャン＝ポール・サルトル著、鈴木道彦・海老坂武訳「復讐されたヨーロッパ」『中央公論』1962年6月号。
 - 33) 海老坂武『人類の知的遺産 78—フランツ・ファノン』講談社、1981年、5-10頁。
 - 34) 鈴木道彦『越境の時—1960年代と在日』集英社、2007年、44頁。
 - 35) 鈴木前掲書（注34）、26頁。
 - 36) フランツ・ファノン「暴力論（上）」『世界革命運動情報』第10号、1968年、58頁。
 - 37) 青江俊「編集後記」『世界革命運動情報』第1号、1967年、72頁。
 - 38) こうしたことから「レポルト社は第四インターの別働隊か？」と噂されることもあったという。それに対して雑誌の編集後記で「当然にも第四インター各派の資料が数として多い。が、これはわれわれが第四インター、あるいはそのどの派かの立場に立つことを意味しない。我々は「世界革命」を追求する限りどの潮流の者でも全て紹介してゆくことを基本方針にする」と説明している——青江俊「編集後記」『世界革命運動情報』第1号、1967年、72頁。また雑誌が使用していた資料の出典も多様であり、1967年10月時点で、北米・中南米・アジア・ヨーロッパ・アフリカの各地域から76種の左派系活字メディアを使用していた——『世界革命運動情報』第8号、1967年、裏表紙。
 - 39) 「著作権問題の周辺」『日本読書新聞』1968年7月29日号、2頁。
 - 40) チェ・ゲバラ「ベトナムと自由のための世界の闘争」『世界革命運動情報』第3号、1967年。
 - 41) Guevara, Che, “Vietnam and the World Struggle for Freedom” *World Outlook*, 5 (17), pp. 434-41.
 - 42) 山口健二『戦後革命無宿』私家版、2000年、60頁。
 - 43) 松田政男「松田政男『戦士』のインターナショナリズムから「難民」のトランスナショナリズムへ—日本赤軍の起源と現在をめぐって」『文藝』2000年8月号、36頁。

- 44) 佐々木祥氏「かずくんと、ともに」東アジア反日武装戦線への死刑・重刑攻撃とたたかう支援連絡会議編『でもわたしには戦が待っている—斎藤和「東アジア反日武装戦線大地の牙」の軌跡』風塵社、2004年、173頁。
- 45) 松田政男「フ란ツ・ファノン『暴力について』解説」『世界革命運動情報』10号、1968年、59頁。
- 46) 松田政男「私怨の空間・第三世界」『別冊潮』1970年10月号、255-6頁。
- 47) 鈴木道彦『政治暴力と想像力—鈴木道彦評論集』現代評論社、1970年、293頁。
- 48) 海老坂前掲書（注33）12頁。
- 49) 平岡正明『大革命論』、河出書房新社、2002年、219頁。
- 50) 松田政男「松田政男が語る戦後思想の10人—私闘する革命（第4回）1960年代から70年代へ」『現代の理論』2007年春号、215頁。
- 51) 1964年までにバンドン会議とOECDに同時に参加したのは、日本とトルコの2カ国だけであった。
- 52) 那須国男「第三世界文明の精神」『日本読書新聞』1968年8月26日号、1頁。また以下の論考にも同様の記述がある——那須国男「アフリカ顕彰とサンゴールの第三世界文明観」『アフリカ』1968年9月号、61頁。
- 53) この記事は、1967年夏にハバナで開催されたラテンアメリカ連帯機構（OLAS）の会議にカーマイケルが出席したのにちなんで公表された——Carmichael, Stokely, "The Third World - Our World," *Tricontinental* 1, July-August 1967, pp.15-22.
- 54) 松田政男「永久革命における現代」『テロルの回路』三一書房、1969年、199-201頁。
- 55) その他、沖縄、アイヌ、朝鮮、部落などのマイノリティも、日本では「第三世界」に属する人々とみなされていた。
- 56) 松田前掲稿（注50）214頁。
- 57) 松田政男「外地引揚者の思想と体験」『白昼夢を撃て』田畑書店、1972年、167頁。
- 58) 松田政男「沖縄の皮膚 日本の仮面」『テロルの回路』三一書房、185頁。
- 59) 松田前掲稿（注46）256-7頁。
- 60) 松田政男「松田政男が語る戦後思想の10人—私闘する革命（最終回）七〇年代から八〇年代へ、現在へ」『現代の理論』2007年夏号、214頁。
- 61) 松田政男「私の中のテロルの根」『週刊読書人』1968年3月25日号、1頁。
- 62) ただし、武藤は暴力的な戦術を真っ向から否定しているわけではない。ファノンは、植民地からの解放という第一の目標を達成するために、暴力を「最も効果的な戦略」と考えていたことには肯定的な評価を下している。問題は、「暴力主義」にしろ「非暴力主義」にしろ各々の個人的な信念や衝動に駆られて自らの社会が置かれた状況を考えずに現実社会にそうした個人的信念を貫こうとする非戦略的な態度であると断じている——武藤一羊「真の革命とは何か—松田政男氏の暴力主義論への疑問」『週刊読書人』1968年4月8日号、1頁。
- 63) 小田実『第三世界の革命』筑摩書房、1970年。
- 64) 小田実『この世界、あの世界、そして私』河出書房新社、1972年、20頁。
- 65) Takata, Kei, "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties," *The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture*, 10 (2), 2017.
- 66) 小田実『この歴史、あの歴史、そして私』河出書房新社、1972年、125-6頁。
- 67) 小田前掲書（注66）125頁。
- 68) 小田は1932年6月、松田は1933年1月生まれのため日本の学校制度では同学年にあたる。
- 69) 小田前掲書（注64）44-5頁。
- 70) 小田前掲書（注64）49頁。

- 71) 「『松田』ら四人も国外退去処分」『朝日新聞』1974年9月7日号・夕刊、8頁。
- 72) 桂秀実・井上紀州・松田政男他『Left Alone—接続するニューレフトの68年革命』明石書店、2005年、75頁。

<ABSTRACT>

**In Between the “First” and the “Third World”:
Ambivalent Encounters with “Third Worldism”
in the Japanese Global Sixties**

TAKATA Kei

This paper explores how Japanese activists conceived “Third World” / “Third Worldism” and linked themselves with the movements in non-western regions during the late 1960s to early 1970s. The “Third Worldism” was a significant part of the global sixties movement. While it also influenced the Japanese sixties on its radicalization and transnationalization, Japan’s comparatively unique position within the three-world model, being one of the very few non-western countries in the “First World” region at that time, brought an ambivalent and complex attitude while forming solidarity with the Third World. Through analysis of activist adoptions of “Third World” / “Third Worldism” concepts and their translation of Franz Fanon, the paper discusses the ways in which Japanese intellectual/activists developed a unique interpretation of the Third World – a space of personal enmity – as well as a certain moral sentiment – solidarity with sacrifice – while searching for possibilities to build solidarity with the “Third World.”